

徒然草

ネパールの太った野良牛の謎

豊間根則道
主席研究員
(株) 国際開発センター

ネパールはヒマラヤを抱える山岳国で、ネパールと言えば高い山を思い浮かべる人が多いことでしょうが、実はインドとの間にはかなり広い平地も広がっています。インドの大平原の北のはずれが帯のようにネパール領になっているのです。この部分は 50 キロメートルほどの幅でネパールの西から東までずっと続いており、ネパールではタライ (あるいはテライ) と呼ばれています。このタライでは人間も気候も文化もインドそのもので、シェルパ族に代表される山岳国ネパールのイメージとはかなり違います。

このタライで、ネパールには野良犬ならぬ野良牛がいるということを知りました。インド国境にほど近い村を車で走っていた時、スタッフが急に珍しいものを見つけたと言う様子で、「ほら、あれは free ox だよ」を指さして教えてくれたのです。野良牛を英語で言えば stray cow/bull とでもなるところかもしれませんが、そのスタッフは stray という語を思いつかなかったので咄嗟に free と言ったのでしょう。しかし、今辞書を引いてみると「道に迷った」「はぐれた」という意味の stray より、「何にも束縛されない」という意味で free と呼ぶ方がその時の野良牛には当てはまっていたことが分かります。咄嗟の訳が正しかったのです。

さて、指さされた方を見ると、一頭の牛が悠然と草を食べています。驚くべきことに、その牛は丸々と肥えているのです。痩せ細った野良犬と同じような姿を想像した私は見事に裏切られました。

実はネパールで見る家畜としての牛はがりがりに痩せているのがほとんどで、腰骨が浮き出、骨格に皮が張り付いたようなかわいそうな姿をしています。青草の乏しい乾季には餌に稲藁しか与えていないようですから、ダイエットをさせているようなもので、太りようがありません。家畜の方はがりがりに痩せ、野良の方が丸々と肥えている・・・皮肉なことですが、これが驚くべき事実だったのです。

スタッフの説明を聞くと、この野良牛には何人もちょっかいを出すことができないので、どこの草を食べようが、誰も止めることができないのだそうです。なるほど、それで好き勝手に草をたっぶり食べて太り、毛並みもつやつやしているというわけです。野良牛が肥えている理由は分かりました。

しかし、ではなぜこのような野良牛がそもそもいるのでしょうか。牛は農家にとって大事な財産ですから、それが誰の持ち物でもないというのは不思議です。何か理由がなくではなりません。

スタッフは特にその理由までは説明してくれず、私も敢えて問い質すことをしなかったので、その場はそれで終わりました。しかし、後になってからその「謎」が私の頭にこびりついて離れなくなりました。

野良牛はその一頭に限られ、家族と一緒にいるわけではないようです。野良牛の家系があつて代々続いているということではない。とすると、この牛は何かの理由で棄てられたということです。うーんと考えて私は次のようなセオリーに辿り着きました。なかなか説得力があるではないか・・・と自分では思ったのです。

私が目をつけたのはその野良牛の毛の色です。白と黒のぶち、ホルスタインにそっくりだったのです。実はネパールで見る牛はほとんどが役牛で、普通の農家では乳牛は飼っていません。乳牛の代表であるホルスタインは、よってほとんど目にすることはありません。しかし、この野良牛はホルスタインそっくりの毛をしています。珍しいことです。私のファンシーなセオリーはここから始まりました。

ネパールにいる牛はインドに多い牛の系統と思われ、こぶがあつたりなかつたりしますが、毛の色は基本的に白、ベージュ、茶、焦げ茶のどれかです。黒牛はまず見かけません。ところが、遺伝子のいたずらか先祖帰りをしたかで、白黒ぶちの牛が生まれてきた。飼い主はびっくりしたと思います。見たことのないものを前にして、飼い主はそこに「邪悪なるもの」を感じたのではないのでしょうか。何か不吉なものの予兆と考えてその子牛を飼うことを忌避し、ヒンズー教徒として殺すこともできずに野に棄ててしまった・・・。村人も感じるころは同じでしょうから、皆恐れて手を出すこともなく、かくして野良牛が誕生した。

どうです、説得力ありますよね？ もしこれが正しいなら、ネパールの人々の深層心理に巣くっている「差別」も説明できるのではないかとさえ思わせる見事なセオリーです。私自身は非常に納得しました。

それから二週間ほど経ったある日、頃合いを見てもう一度その野良牛のことを持ち出し、なぜ野良牛がいるのかの理由をスタッフに訊いてみました。その答は次の通りだったのです。

二つの理由のいずれかが考えられる。一つは、ヒンズー教のシバ神に捧げた供物。以前、スタッフが子どもだった頃は、人が死ぬとその都度雄の子牛を供物として捧げる習わしだった。その子牛が野良牛になる。今はそういう風習はめっきり減ってしまったが、それでもまだ一部に残っている。

もう一つの理由は最近の現象。近年、畜産局が種牛を農村に無料で提供し始めた。農民はそれを野に放して飼っている。誰もちよっかいを出してはいけない決りになっており、皆それを守っている。

ああ、なるほど・・・と頷くしかありません。私のファンシーなセオリーはすげごと退場です。どちらの理由にしてもまさしく「down to earth」、「no nonsense」で、現実味たっぷりです。私が見た野良牛はそのどちらかだったのでしょ。きっと種牛の方だったのでないかと思ひます。これで「謎」はあっさりと解けました。

ことに、この種牛の話は非常に示唆に富んでいます。普通であれば、大事な種牛は畜舎に入れて、鍵までかけておこうとするものかもしれませぬ。しかし、ここでは大事な種牛だからこそ野に放ち、好き勝手に草を食べさせて太らせ、しかも飼育管理に誰の人手も要しない。野にあれば誰もが見て相互に監視していますから、悪さをしようとする人もいない。コロブスの卵です。何と賢い。誰が考えたのでしょ。他の場合にもいろいろと応用できそうではないですか。

別のところで私は小学生に支給する就学補助金制度を例に「ネパール人は理屈ばかり、制度設計が下手だ」と断言したことがあるのですが、もしこの「野良牛制度」を考え出したのがネパール人だったら、前言取り消しです。脱帽しました。